會報

昭和十三年三月　74　日本山岳會

日本山岳會事務所よりの懷古

小島烏水

日本山岳會事務所(不二屋ビル内)は、東京芝區琴平町一番地にある。この邊は、虎の門とも呼ばれ、電車や、バスの停留場も、虎の門で通つてゐる、琴平町とは、俗に所謂こんぴらさま、即ち金刀比羅宮が、同町に鎭座してゐるので、そこから起つた町名である。(今は事務所も、金刀比羅宮も、同町同番地になつた)虎の門は、江戸三十六城門(或は三十六見附とも呼び做されてゐる)の一つである。

虎の門が、明治何年まで保存されてゐたか、私は未だ調べてゐないが、江戸城に纏ぐらした外濠の内の、嚴然たる城門であつて、和田倉門前の「龍の口」(門前、東堀の餘水を落したところ、これも今は埋滅)と共に、柳營の龍虎として、併稱されたものである。

明治四年、本邦初期の洋畫家にして、又寫眞術の先驅者なる横山松三郎が、新政府の命を受けて、江戸城を中心に、三十六城門の寫眞を撮つたのが、遺族の手許に保管されてゐる。何でも、蜷川某氏の建白に依つたもので、原寫眞には、高橋由一(同じく初期洋畫家)が、手彩色を施こしてゐる。その寫眞の一つに、虎の門が、在りし日の壯嚴なる雄姿を、寫されてゐる、虎は死しても皮を殘すやうに。

四世廣重こと、故菊池貴一郎翁が、記憶に依つて、且つ描き、且つ記述された虎の門のスケッチを見ると、門は南に面して、外濠は南から北へ受け、東へ流れてゐる、その南の濠は、赤坂溜池の水を、石の大樋へ受けて、この濠へ落され、門前から又落ちて、大瀧の姿をなしてゐるが、この瀧は、前記横山の寫眞にも明白に出てゐる、夜陰などは、水音がドン、ドンと凄さまじく鳴るので、俗に「ドンドン」と稱へてゐた。

明治十六年の東京圖を見ると、虎の門は、その桝形地形と共に、昔の儘に存在してゐる、赤坂溜池も、その頃は、未だに沮洳地を殘してゐる。隅田川や江戸川は言はず、内濠と外濠の二重環のめぐるところ、江戸城それ自體は、正に水の都であつた。

現今は、勿論虎の門もなく、溜池も、外濠も埋められて、繁華な大路を、電車や自動車が走つてゐるが、事務所附近、外濠の跡を尋ねると、事務所(不二屋ビル)と向ひ合つた今入町は、今は貧弱だが、琴平町などの名が無かつた昔から、町名のあつたところである。同町は、かつては濠際の河岸地で、今の芝口河岸や、金杉河岸の如きところであつた。この町は、現在殘つてゐるが、その今入町と、町の背後(事務所の方面から見て)即ち舊貴族院の跡で今は内務省土木出張所の、赤煉瓦塀の前に挾まれた一區劃、即ち現に同潤會や、經濟雜誌のダイアモンド社の在るところ(内幸町の一部)が、昔の外濠であつて、濠は今の文部省の一角をも、貫ぬいてゐた。尤も現今は、文部省前の直線路は、櫻田門へと向つてゐるが、櫻田門は、ほんとうは外櫻田門と呼ぶべきで、内濠に面し、外曲輪總門の大役を務めてゐたのである。虎の門は、その前衞ともいふべく、外濠に面してゐる。明治初期の區分に依れば、虎の門の所在地は、第二大區第一小區の中で、外務省のあるところが、霞ヶ關一丁目、日比谷公園のあるところは、近衞隊の屯所兼練兵場で、霞ヶ關二丁目、虎の門の位置は、幾分か霞ヶ關の前を、日比谷の方へ寄つて、現在海軍省附屬海軍文庫のあるところの南側ではないかと想像せられる。門内には、三條實美公の邸があつた、山岳會事務所から、恐らく二丁とは隔たるまいと思ふほどの近さである。

以上のうち、虎の門の所在地點は、古い地圖を展べて、當推量で書いたのだから、識者の是正を俟つ。

○

江戸時代には、この邊、諸侯方の邸宅地で、大藏省に隣る外務省の外構海鼠塗の建築は、黒田侯の上屋敷、長屋門であること、人の知る通りである。こんぴらさまも、その頃は、京極侯の邸内に祀られて、附近は町家でないから、琴平町といふ町名も、明治初期に出來たのである。こんぴらさまは、崇德天皇外一神を奉祀したもので、讃岐國象頭山から勸請され、毎月十日、庶民に參拜を許され、その日は境内に掛茶屋も出來て、大層な賑ひであつたが、今日の如く、獨立した神社でなく、且つ神佛混淆の時代だから、こんぴら大權現と呼ばれてゐた。こんぴら樣の後門には、外濠の水が流れてゐた。今も殘つてゐるこんぴら樣の、唐銅(?)鳥居の柱脚に彫りつけられてある文字を、拾ひ讀みすると、年代不明ながら、鑄工土橋兵部作、彫工村田多兵衞の名が見え、發願人中には、江戸新吉原の松葉屋半藏をはじめ、玉屋、扇屋、大口屋、中萬字屋など、江戸盛期の芝居、錦繪、洒落本などで、お馴染の全盛高名競べが、見出されるのも、今となつては、何となく昔戀ひしい。

私はこんぴらさまの前を通ると、いつも、高野長英の慘ましい悲劇を憶ひ起す。長英は、天保九年に、警世の大文字「夢物語」を書いて、お咎めを蒙り、翌年終身徽役を申し渡され、入牢七年に及んだ時に、牢獄附近、出火のため、一時解放されたが、その儘、ズラかつてしまひ、四國まで落ち延び、平生こんぴらさまを信仰してゐるので、讃岐の本社に參詣して、嘉永三年に、江戸へ潛入し、藥品で面を傷つけ、澤三伯と僞名して、醫師を開業してゐたが、その年の十月、こゝ芝の金刀比羅宮へ

おまゐりをしたのが、いけなかつた。世を忍ぶ姿を、運悪るく、門前で同獄囚の破戸漢に見つかつた。囚人は、おたづねものの長英の後を、竊かに跟けて、青山百人町の隠れ家へ入つたのを、とくと突き留め、御奉行所へ「恐れながら」と出た。やがて百人町の宅へは、十手が閃めき、御用々々の喚き聲が聞えた、長英はたつた一人の子供をおぶつて、捕吏の一人に傷を負はせ、彼等のひるむ隙に、我と我が手で喉を貫ぬいて死んだ、享年四十七歳。私が、青年時代に愛讀した藤田茂吉先生の名著「文明東漸史」の挿繪に、長英闘死の石版圖があつて、子供をおんぶして、片手で、死に物狂ひに闘つてゐる長英の姿が、いぢらしく未だに目にちらつく。

電車や自動車が、不二屋ビルの前を、繋がつて通る、近代建築の一室の中に籠もつて、古典建築の木造城門を空想すると、それが怖ろしい重壓感を以て、眉に落ちかかつて來る。そこへ、新文明開拓の、悲壯なる先驅者の血みどろの姿が浮かんで來る。ノスタルヂアに近い情緒が、寄る年波の、私の胸にも、波を打つ、脈々として波を打つ。

× × ×

山岳書とデディケーション

小林義正

或る日、山仲間の一人から折込みのある雜誌「山小屋」が届けられた。見ると荒井道太郎氏の「山岳書とデディケーション」と云ふ一文が掲載され、自分が曩に某書店の古本蒐集目錄に寄稿したことが引用されてゐたが、もとより自分のそれは氏の如く群書を渉獵しての事でなく、偶然或る機會から興味を覺えたことを思ひ出すまゝ、筆にのせて見たまでのことゝて聊か面はゆい感がした。併し、これに依つて世間には案外こんなことに興味を持たれる人のあるのを大變嬉しく思ひ、僅かではあるが其後知り得た幾つかの中、異色あるものを拾ひ、本誌を借りて申述べて見度いと思ふ。

昨年末、ヒマラヤに關する文獻を少しばかり調べた事があつたが、偶々

Sould, J.-A Century of Birds from the Himalaya Mountain. 1831

を見ると、著者ジョン・ゴールドから大英帝國のウイリアム第四世陛下並に皇后に捧ぐと云ふ極めて感謝の意のこもつた獻辭があつた。著者は云ふ迄もなく鳥類分布研究の第一人者であり、巧緻な手彩色圖版八十葉を收め、且つ之に伴ふ詳細な解說を附したヒマラヤ鳥類の一大圖鑑である丈に、此の獻辭を發見した時は尠なからず喜んだ。

ところが、之れと好固の對象をなすものに、

Hooker, J. D.-The Rhododendrons of Sikkim-Himalaya. 1849

がある。前者が鳥類研究の權威書であれば、これはシッキム、ヒマラヤ地方の石楠花に關する珍重すべき文獻であり、

To Her Rogal Highness, The Princess Mary of Cambridge

と公獻されてゐるところ、まさにヒマラヤ典籍中の双璧と云つてよからう。因に、前者は一八三一年ロンドン出版、時價約三百二十圓位、後者は同じく一八四九年の出版に係り、時價約百五十圓位の稀覯書である。

次に、有名なスベン・ヘデインのアジア旅行記 Through Asia のデディケーションも

To His Royal Highness The Prince of Wales

となつてゐるが、之等先人の貴重な記錄が、高貴な御方に公獻されてゐると云ふ事實は、其蔭に英皇室の文化に對する深い關心のあられたことを物語るものとして、今更ながら讀む者に深い感銘を與へてゐる。

更に、半世紀を經た今日、堂々古典としての眞價を認められてゐるバドミントン叢書中の Dent, Mountaineering. が同じく Prince of Wales に公獻されてゐるといふのも、等しく山岳人の誇りとしてよいと思ふ。

一般の場合、デディケーションが父母や先輩に宛てゝなされるといふことは、極めて當然のことゝして怪しむに足りないが、初期のヒマラヤに關する著書が、之等の地方の先覺者や先輩或は友人などになされてゐるのを見ると、先人苦心の跡が偲ばれると共に、人としての奥床しさが窺はれる。

其の例として

Freshfield, Exploration of the Caucacus.

に於て、著者がドンキンの故靈に公獻した一篇の短詩

清純なる光の地に、氷雪の祕密を
捉へて白き靈よ
爾に對しては如何なる僧も儀式を
行ふ能はず
如何なる雇ひ人も罪列を導き能は
ぬ。
遙けくも遠きコーカサスの高所に
て失せし爾よ、
我等は如何にして其の失せしやを
知らず、唯我等ぞ知る、
自然がその解釋者と友とを安らか
にも眠らしむる處を、
守り星の其の夜を見張り山壁の
其の護りを堅むるを。

の如き、又同じ著者が

Round Kanchenjunga

では東部ヒマラヤのパイオニアーたるサー・ジョセフ・フツカーに公獻してゐるのがよき例である。乍然、本年 Hadder & Stoughton から出版の Rutrege, Everest. の普及版を見ると、To All Everest-ers となつてゐるが、これなど近年ヒマラヤが如何に世界人にまでデビューして來たかを告げる標識として面白いと思ふ。

最後に、これはお札博士として有名なフレデリツク・スタア教授の「フジヤマ」の開卷第一頁に

「一九二三年九月一日の震災に富士山の蒐集を救はんとして竟に落命せる曾我部一紅の記念に獻ぐ」

とあるのに御氣附きの方は案外尠いのではあるまいか。筆者も恥しながら鳥水氏の著書で初めて承知した一人である事を白狀する。曾我部一紅の人となりを簡單に述べるならば、十六年間富士山を一心に研究し、眞實、富士に惚込んだ人と云ふのである。富士を愛するあまり富士に關するあらゆる珍籍、稀書を蒐め、何人が見ても、最早や、これ以上を加ふることは不可能と思はれる域に達してゐた。然るに、突如一九二三年關東大震災の襲ふところとなり、一旦彼は家を飛出したが、文獻を取り出すべく、再び家に戻つたとたん、家が倒壞し、彼はその下敷となつて、富士山の典籍と共に猛火に包まれて仕舞つたのであつた。スタア教授は曾我部が第七十回目の登山の折、案内されたとのことであり、恂に、彼の功績を稱へる好固の獻辭と云ふべきであらう。

初期アルプス描寫家たち

高橋文太郎

1

その頃の自然科學者の或ものは、アルプスの美と驚異について心を動かし、未だ足跡の到らないそれらの地域について踏査し且つ敍述しやうとした。これら探索者たちは、當時にあつては、一つの新しい美であり、新たに發見された恐怖または驚異の對象であつた、氷に鎖された山や氷河について、最もその研索の熱意と興味とをもつてゐた人々であつた。

そして、アルプスの中、オーバアランド地方のトポグラフイーが、稍々組織的にこれらの自然科學に興味をもつた人々によつて取り扱はれたのは、十八世紀も後期に屬してゐる。この方面について重要な敍述をなした著書として、アルトマン J. G. Altmann の「瑞西氷山記」(一七五〇年)とか、グルーナア G. S. Gruner の「瑞西地方の氷山」(一七六〇年)などが先づ注目される。この二人共に、ベルン大學の教授であつたといふ以外には、殆ど知られてなかつたし、どの程度まで山に登り探檢をしたかの點も明かにされて居らなかつたが、しかしその調査はよく行はれ又著作も當時の智識としては優れたものであつたと、例のグリッブル Francis Gribble は記してゐる。事實、グルーナアの著書に挿入されたマイヤア Meyer の描畫によりツイング A. Zingg が刻版した「グリンデルワルト」や「ローヌ氷河」の展望圖は、この當時にあつては、恐らく驚異に價する代物であつたらうと、吾々にさへ想像することが出來るのである。

初期アルプス地方の山旅者として注意されたコックス William Coxe も、その著「瑞西旅行」(一七九一年)には、流石に山岳風景美の發見者であつただけに、「下部グリンデルワルト氷河」の挿圖などを入れてゐる。この繪は、ビイアマン Birmann が描き、ライナアマン Reinermann が刻版したものであつた。尙この頃にあつて、地形誌的な山岳描寫をなしたものに、ハンドマン Handmann とかベッソン H. Besson、プリノン Pernon などの人たちが數へられる。尤も、このうち、ベッソンはもともと地質學者であつたから、詩人であり同時に生理學解剖學研究のハラア Albrecht von Haller とか、前述した氷河研究のグルーナア、植物、鑛物研究のショイヒツアー J. G. Scheuchzer、高度計(氣壓計)研究のドウ・リュック J. A. de Luc などと共に、初期アルプス研究の科學者群の一人に屬してゐた。これらの連中と共に、別派の人ではあるが、逸し去れないのはブウリイ Marc Theodore Bourrit (1735—1815)であらう。彼は、ほんとうに心から享しんで山登りをした人で、當時における眞の登山者として取り扱つてよい位置にあつた。これと相前後して現はれた一人の偉大な科學者ドウ・ソウシュール H. B. de Saussure (1740—1799)をも記して置かねばならないが、この人達あたりを堺にして、恐らく山の自然美といふものが山への實踐と相俟つて賞讃され、從來と異つた態度において見返しされたのである。例のクーリッヂ W.A.B. Coolidge も、山々に登りその懷ろにあつてその自然美に接し且つ敍述する役割はアルトマン、グルーナア、ブウリイ、ドウ・リュック、ソウシュールなどに托せられたと記した位である。

こういつた自然科學の研究者たちが、氷河を觀察して、それの克明な描寫による銅版畫を作つて一般に知らしめたのは、直接に自然美の認識普及を目的とはしなかつたとしても、歸するところは一方において、驚異に充ちた自然の發見であらうし、同時に新しい自然美の紹介であつたことは事實として爭へぬ。

そして其の當時にあつて、氷河に直面してその輝ける姿の描寫に畫筆をもつた前述のマイヤアとかビイアマン、ハンドマン、プリノン、フォン・フーバア Von Huber などの初期アルプス畫家たちは、恐らくこんな高所の描畫に手をそめた最初の人たちであつたらう。當時は眼に映つたものを唯克明に寫しとるだけでも、大した仕事であつたと思はれる。それから二百年も經つた今日、吾々が假令ひ書物を通してでも、それらの意義ある描畫に接することの出來るのは、悅ばしいことだ。私たちは、この幼稚な、しかも眞實で古めかしい幾つかの銅版畫に、當時の山の自然美發見といふ一つの大きな事柄を結びつけて見たい。そして出來るなら、これらの山岳畫宗祖ともいひたい一群についての、埋もれた事蹟の斷片なりとも、掘り出しておきたいものである。

2

ところで、その發掘作業は增して歐洲十八世紀のものだけに、容易なことではない。今は手許にある書物で判る範圍だけをまづ述べるより仕方がない。前述M・T・ブウリイはこの多くの描寫家たちに比べれば、書物に經歷やその業蹟が紹介されてゐるだけに仕合せである。

彼の繪よりも或は彼の山登りさへよりも、ブウリイその人を有名にしたのは、彼の著書であると、グリッブルをして言はせてゐる程、ブウリイの主として氷河に關する新しい記述の多くは當時において優れて居つたものらしい。彼の著「氷河新說」"Nouvelle Description des Glacières" 1773 の中には、自ら描いたモンブランやシャモニイ谿谷の展望圖を挿入しておつて、之をグリッブルの書で觀ると、仲々そのスケッチの手際も並々でない。又別の著「アルプス新說」"Nouvelle Description des Alpes Penuines et Rheliennes" 1783 にも、「グリンデルワルト氷河」や「ローヌ氷河」展望の原畫を著者自ら描いて刻版にしたものを入れてゐる。この人は科學者でなく、ヂェネヴアの寺院附き音樂師であつたが、生來の登山好きで、シャモニイを根城として氷河探檢を行ひ幾度かのモンブラン登行を試みたとベールは述べてゐる。そこで、ブウリイの繪が當時の他の人々の其れに比べて、どことなく魅力のあつたといふ譯は、グリッブルの記すところに依つて略々判つた。卽ち、彼は十八世紀中葉に細密畫々家 Miniature painter として世に出たといふので、全く繪に素人でなかつたのである。彼の繪もさうであるが、風景の下には長い杖をもつて、つばの廣い帽子を冠つた人間が、さも珍らしさうにそして恰も驚異の快哉を叫んでゐるかのやうに、手をあげ或は指さしてゐる樣が、當時においては多く描かれてゐる。これがそのころのアルプスの寫生畫に見える特色であり、新しく珍らしい氷河や谿谷又は雪と氷の山に對した人々の心持をそれらの動作は洵によく現はしてゐる。

ブウリイは一七七三年から一八〇八年の間に前述のやうな氷河やモンブラン又はペンニン、レェティアン、アルプスなどに關した著作を併せて六つも書いてゐる。何れ彼獨特の細密描寫の刻版畫が挿入されてゐるで

あらうから、これらの書を觀たら、もつと彼のスケッチについても多くを言ふことも出來やうが、その本も觀られないし又それが悉く佛蘭西語で書いてあるので、假令手にする機會があるとしても、私には苦手である。ブウリイを特にアルプスの歴史家としてもグリッブルなどが推賞してゐることを附け加へて、彼の紹介を終ることにしたいが、彼の繪の一二を觀ても云へることは、その後に現はれて峠の風景を徹底的に描いたブロックドン William Brockedon の平凡劃一的な刻版畫などよりは、その題材において又その魅力において確かに秀逸であるといふことである。

上述の多くの人々より以前に現はれて、瑞西地方の氷河研究にその業蹟を殘したメヒリアン Matthew Merian (1593—1650) があつた。アルトマン (1697—1758) やグルーナアより一時代前の人であつたが、特にグリンデルワルトの氷河の銅版畫をつくり、當時に於いてはそれが代表的作品として扱はれたこと、又恐らく之が最初の氷河刻版であつたらうとクーリッヂが記してゐる。そしてメェリアンは一六四二年に瑞西地形圖誌といふほどの一書 "Topographia Helvetica" を著はし、この中に多くの驚異すべき山の自然現象に關する刻版畫を入れた。併しこれらの說明についてはムラルトが試み、後になつて王立協會の會館に收錄された。ブウリイのものなどより餘程、幼稚で地形誌的であるが、この山旅家である刻版師が當時早くも氷河や山村に注目し且つ自らその原畫のスケッチをも描いた人だけに、こゝに記しておかねばならない。

それからマイヤアであるが、前揭書の挿繪に入つてゐる名前がすべて單に Meyer であるので、如何なる人であつたか、探し出すのによい手懸りが見出せないのは洵に殘念である。彼の繪はグルーナアの「瑞西地方氷山」に主として入つてゐる。このマイヤアがユングフラウやフインスタアラールホルン登行で有名な例のアアロウ Aarau の豪商マイヤア一家の一族に果して屬して居つたかの疑問が殘される。初代マイヤア Jahann Rudolf Meyer (1739—1813) ならば、グルーナア (1717—1778) と同時代であるし、又マイヤア自身は有名な特にアルプス山間の地圖製作發行者として當時聞えてゐた人である。そのお抱への測量師の中にはオーベラールヨッホ初登行のワイス Herr Weiss なども居たし、マイヤア自らも山旅を愛し、聖ゴタルド、フルカ、シャイデックなどの峠越えをした經驗も有り、恐らくグリンデルワルトなどはその主なる逍遙地であつたらうと推測される。地圖を作る位だから、自らもスケッチ位ゐはしたらうと凡そ考へられるのだが、例の山岳誌家のグリッブルもクーリッヂも、初代マイヤアがグルーナアと直接の交渉が有り且つ繪を描いたことには毫も觸れてゐないのだから困る。もう一つ困る材料として見出されるのは、ショイヒツアーのヘルヴェティカス "Helveticus" に同名の Meyer といふ人が挿繪「グリンデルワルトからの雪山展望」や「グリンデルワルト氷河圖」を描いてゐることだ。この書は一七二三年に出てゐるのだから、この初代マイヤアが生れる前のことに係つてくる。

ところが Johann Meyer といふ名前がクーリッヂの書から見出され、自然科學者ワグナア J. J. Wagner (1641—1695) の刊行物には一六八八年にこのマイヤアがつくつた縮小刻版地圖(ガイガア H. C. Geiger 1599—1674 のつくつた大きな地圖からの)が入れられて有ることが記してある。從つて先に述べたショイヒツアー (1672—1733) の書に入つた刻版畫の作者はこのマイヤアであることを想像するのは年代から見て大した無理もない。然しフアロウの初代マイヤアでないことは、之ではつきりする。すると當時少し時代を異にして二人の同名異人が居たことになり、その中一人はフアロウのマイヤアとの關係の有無が疑問として殘される譯である。

× × ×

會費拂込みを願ひます

モリス氏の話

吉阪隆正

C. F. Morris

會報七二號に檀氏が、C、ジョンモリス氏との會見の記事を載せて居られたが、我々も色々と、モリス氏に御話を伺つたので、大分後れてはしまつたが、こゝに、その一端を述べたいと思ふ。

十一月廿九日、部員總會を了えて三々五々打ちつれて歸宅する時、先輩の中島氏から、

『切角モリス氏が東京に居られるのだから、御會ひしては……』

との話があつた。そこで早速、電話で御都合を伺つて見ようと衆議一決、ジャンケンの結果、小生が交渉係の役を仰せ付けられた。電話が帝國ホテルに通じたまではよいが、さて掛つて見ると何から切り出してよいのか甚だ迷はざるを得ない。やたらに頬の肉をビクつかせて、どもりどもり話をしたにも拘らず、案外簡單に解つて、

『それぢや、明朝九時半かつきりに來てくれ。』

といふ事となつた。

× × ×

翌朝、角帽四つ、圓帽二つ、自動車を横付けにして、得々としてホテルに入つた。丁度九時半だつたが、

『只今御食事中ですから、暫くこれにて御待ちの程を』

と丁寧におぢぎをされて、六人は顏を見合はせた。

昨夜から夢が一つ一つ現實になつて行く樣な愉快さを味つてゐたのだが、今の言葉に『この山を巡ると、エヴェレストが見えますよ』といはれた程、感激的なものがあつた。

顏は寫眞で見知つてゐるのだが、一體我々に比較したら、どの位の體格の持主だらうか。どんな聲で話すだらう。どんな歩き方をするだらう。一つとして好奇心を唆らぬものはなかつた。軈て現はれたのは、ごく平凡な英國人だつた。中肉中背の英國的の感じのいゝ素朴の樣ながつちりした人だつた。

『我々は早稻田大學の山岳部の者で、ヒマヤラで幾多の經驗を積まれた貴殿から色々有益な御話を承りたいと思ひまして、御迷惑も顧す……』

と用意して來た挨拶を述べ終らぬ内にごく親しく、

『ぢや何だ。こゝではうるさいから上へ行かう』と

いはれ、先題に立つて階段を上られた。更に待ち切れないといつた調子で、一同が坐るか坐らぬ内に、用意したノートを出して、途切れた演說の如く

エヴェレスト遠征の省察

ヒュー・ラトレッヂ

一九三六年度のエヴェレスト遠征記錄 Everest: The unfinished adventure の中 Reflection の一章中參考となる部分を譯出して見た。ヒマラヤへ遠征隊を送る場合にこのエキスパートの言には傾聽すべきことが多いやうに考へられるから

この一章は、第一節パーテイ、第二節ポーター、第三節行動、第四節裝備、第五節食糧、第六節將來の順に說かれて居る。

（島田生）

一、パーデイ

大ヒマラヤ遠征の隊員を經驗にのみ賴つて選擇する時代は過ぎ去つた。既に體驗が吾々に肝心な點を敎へて呉れたのである。エヴェレストへの新しい試みが發表されたとき、受取つた多くの志願書を檢討して見ると、若人達のあるものは一般に自己の體力と熱情とに全幅の信賴をよせて居るやうだ。從つて最も親切な方法で彼等の迷夢を醒してやらねばならない。勿論登山能力は第一に必要なことだが、これはより嚴密な定義を下さねばならぬ。今は仕事に限らずスポートでも專門家の世の中である。從つて登山の一分野に於ける技術では一時代前よりも遙かにすぐれた人間は立ちどころに探せるが、各分野に堪能な人を今日發見することは容易な業ではないだらう。その後者こそ眞の登山家でありそしてエヴェレスト向きの唯一の素材なのである。この山には相當手强い岩があるが、と云つてイギリス湖水地方の最難場をリード出來る男を連れて行つたとて單に困難を招くに過ぎないことは明かだ。岩登りのエクスパートはヒマラヤの氷雪の上では全く途方に暮れるであらうし、巨大な山面では登路探索者としても失敗に終るであらう。また非常な高所では全然活動することも出來ないに違ひない。特殊な技能や智識を持たないでも萬能な熟練家は、もし忍耐力と立派な人格と、更に何よりも體驗といふ不可缺な性質を所有して居る限り、岩の上だらうが、氷や雪の上だらうとあらゆる狀態に自分自身を適應させて行くことに充分馴れて居るだらう。こゝに本當にたつた一つ、君のパーテイを選擇する理想的な方策がある。それは候補者をヒマラヤでテストすることだ。これは勿論實行不可能な理想案であるが、しかし近年ヒマラヤで多くの仕事が遂行され、經驗者の數が次第に增加しつつある。私がこゝに使ふ經驗者といふ言葉は初期の技術的訓練を英本國又はアルプスで受けて、從つてよりスケールの大きな仕事のために充分準備の出來て居る登山家にのみ限つて用ひるのである。

ヒマラヤで初心者を訓練することは非常に困難で、その理由は訓練された登山家が無意識的に行ふ體の調整が非常に初心者を疲れさせるため高所に到達した時にはもう奪鬪する餘力を殘して居ないからである。

エヴェレストでは天候はさて置くとしても、すべてのものはエネルギーの保存に賴つて居る。これは、年期を入れてリズミックに登攀し、完全なバランスを保持して登ることを學んだ人々によつてのみ達成されることが出來る。スマイスやシプトンが登攀を始めるのを注意して見ると、非常に緩漫に動いて居るやうに思はれるが、そのペースは始めから終りまで決して變らない。一つ一つの續く足場は足がその上に來る前に無意識裡に研究されて居るので、まどつくことなく、バランスを取戻すのに努力を拂ふ必要がない。體重は一點から次の一點へ何等の躍動もなく移行し、步幅は短い。全動作は何等急がずその代り休みなく續く。このやうな技術は短時日の間では學べず、アルプスの峰へ時間記錄を爭つて突進して、ヒマラヤでも同じやうにやれると自負して居るやうな、せつかちな若い運動家（アスリート）には修得されまい。

また別なタイプの人もあつて一見好適な人のやうで、非常な高所に行くと駄目になるのがある。この種の人は體質が丈夫で、例外的な體力を

『我々はヒマラヤへ行く心算である。一九三九年の我が山岳部廿週年紀念には、是非カンチか、ナンガ・パルバツトへ登る所だつたが……』

『カンチは非常に難かしい山だ。山ぢや凄い友達のスマイスも怖しいといつてゐた。まだまだ外に山は澤山あるから、もつと低いのに行きなさい。』と

始めは餘り問題にされない樣な氣色頗る濃厚だつたので、一寸悲觀した。

併し、器具、食料、旅費等と細々した事まで質問する內に、はからずも、こちらがよいと思つて行つてゐた事が、例へばアークチツクテントの形などが、エヴェレストのそれと一致してゐたりして、次第にこちらの實力を認められる樣になつた。それば かりか、こちらの方が却つて優秀であつたりした事すらわかつて來て、わざわざ室まで登攀隊の使つてゐるセータを取りに行つて下さつたり、テントの布地だからといつて、レーンコートを持つて來て見せて下さつたり、更に、ヒマラヤへ行く時は、必ず紹介狀を上げるから、さういつてくれ、とか、ロンドンへ歸つたらペミカンを送つて上げようとか、全く思ひもよらない好意を示して下さつた。

そんなわけで十一時までといふ始めの約束の時間になつても、もつと細々した事でもいゝから質問してくれ、と向ふからのり氣になり、十二時のツーリスト・ビューローの會があるだけで、それまでは暇だからと引きとめられる有樣だつた。もしこゝにその時の質問を全部書き並べたら、それこそ、會報一ぱいになつてしまふだらう。今特にモリス氏が力說した點だけを幾くつか揭げて置かう。

『英國への入國許可を非常に心配して居る樣だが、英領の所なら今願を出しても、來年の夏行ける。問題はそれよりも費金の多少だから、その方さえあればいつでも行ける。

『行くのならば、あまり金のかゝらぬ所へ行くのが得策だ。カラコルムは遠くて、時間と金の徒費に過ぎない。ガルワルか、シッキムの山が一番よからう。

シッキムはカンチを除いても、まだ未登のものが可成りある。ガルワルではケダルナス等面白からう。又もし初登攀を求めるのでなかつたら、カメットは非常に面白い山だ。

『もし少人數で行くのだつたら、器具などわざわざ日本から持つて行くには及ばない。エヴェレスト其の他で使つたものが、皆ヒマラヤン、クラブに置いてあるから、それを借りるがよい。

『多人數で行くのだと、さうは行かないが、私は多人數には贊成出來ない。エヴェレストや、其の他の巨峰に向ふ時、今まで餘り大げさな爲失敗した事が多々ある。五六人から十人位までが一番いゝのではないでせ

持つて居り、自分自身をよい登山家とするためには勞を惜しまず、風雨に曝されることに非常な忍耐と抵抗力を備へて居ることを誇るのであるが、この全く無害な小さな虚榮が彼の身を滅す。一シーズンに法外な數のアルプスの峰々を手に入れたと云ふので彼の名は評判になり、又最も長い日にも全然疲れを見せぬといふことや、睡眠不足や寒氣や飢餓にも平氣だと云ふので評判になる。「すばらしいもんだ」と貴方は云ふだらう。「この男こそエヴェレスト向きだ」と。御説はまことに御尤もである。しかし私は思ふに自然は各々の人間にある一定の限度のあるエネルギーの豫備を與へるものだ。この豫備をあまりに浪費するものは、丁度その人生の中で最も大きな努力を必要とするといふ時になつて身の破滅を覺えるだらう。從つて私の選擇は常に自分自身の力量を滋しみ、不必要な無理を排する人を求める。エヴェレストの最後のピラミッドで、そのやうな人はきつとこゝを先途とあらん限りの力を盡し、榮譽を獲得するに違ひない。

マウント・エヴェレスト委員會は、私の經驗では、いつも遠征隊のリーダーがパーティを選擇すべきだと云ふ原則を承認して來た。一九三三年の場合と同じく一九三六年度にも完全に選擇の自由を附與された。そしてこの種の仕事を遂行したものだけがかかるまかされ切つたための苦勞を體驗するのだ。無責任な地位にある人達は助言することを役目のやうにするから。しかし私は何等の躊躇することなくスマイスとシプトン及びウキン・ハリスを選ぶことが出來た點で非常に有利であつた。いづれも一九三三年度に二八、〇〇〇呎又はそれ以上に到達した人々だから。スマイスとシプトンの兩名と私とは密接な接觸を保ち、すべての決定を協調してやつた。最初吾々は一九三三年度の十六名のパーティよりももつと小人數のパーティの方が得策だといふ意見で、今回は十二名に減じた。シプトンの一九三五年度の偵察の結果ケムプソン、ウォーレン、及びウィグラムが優秀な登山家であると共に「すぐれた高度向き人材」であることが證明された。スマイスは同年アルプスへパーティを率ひ、そこで少くも山登りの能力と環境への適應性とを觀測することが出來たので、醫學的檢査も含めた全要素を考察した結果、この方面からオリーヴアとガヴィンとが選ばれることになつた。こうして登攀人員は完備した。これら八名の中、既に六名がエヴェレストを知つて居ることは測り知られざる有利な點だ。オリーヴアは一九三三年にクマオン・ヒマラヤのトリズルに登頂して、彼が率先權を有すること、また高度馴致の力を持つて居ることを示した。ガヴインだけが獨りヒマラヤの經驗に缺けて居た。

詳しくは後に述べるが、種々の點で、これら八名の登山家は遠征隊を立派なものとした。しかし私は專門家の輸送指揮官を持たぬ弱點があつたが漸くジョン・モリスのやうな一九二二年にエヴェレストにこの使命で赴き、且一流のネパリ語學者を迎へることが出來た。ネパリはシェルパ族のボーターの第二用語である。次に私は醫師は二名必要だと考へた。即ちベースキャンプは山から十二哩離れて居り、氷河上のキャンプの何處でアクシデントや熱病騷ぎが起らぬとも限らぬし、山巓攻擊中には負傷者や疲勞者にノース・コルより上方で即時看護せねばならぬだらうから。醫師をたつた一人しか伴はぬのは運を天にまかせた賭事をやるやうなものだ。登攀隊の一員としてウォーレンは北山稜上で何時でも醫師としての仕事が出來るやうにし、故參の軍醫ハムプリースは平常時は低根據地に駐り、必要に際してノースコルに赴くことにした。第三には今回も無線電信の發信機、受信機共に携行することに決した。これは一つにはディリー・テレグラフとの通信契約がこれらを必要とし、また一つには印度の氣象局が平素私に語つて、若しエヴェレストの天候狀態をベースキャンプから氣象局へ毎日電報で報じて貰へると、天氣豫報作製に非常に役立つと云ふので携へたのである。無電技師は一人しか伴ふ餘地がなく、再びスミジ・ウインドハムに決つた。

うか。ナンダコットも、ナンダデビーもいい例です。

『ナンダデビーは登られなかつたとの噂があるとのお話でしたが、それは全く根據のない事で、私はオーデルもティルマンも親しく知つてゐるから、頂を間違へる等といふ事は絶對にない。

『それから、之は特に注意すべき事だが、遠征隊員は皆互に非常に親しい間柄でなくてはいけない。高い所へ行くと、兎角氣が立ち易く、甘い物や果物の鑵詰め等ではどうにも癒し樣のない事が多々ある。君達は今、エヴェレストの隊員は、世界の各地に散在してゐて、それが、ガングトックで初めて顏を會はす樣に云はれたが、決してさうではない。我々は皆同じ大學に學び、共にアルプスに遊び、最も親しい仲のものばかりだ。ドイツの遠征隊にしても、成功してゐるのは皆さうだ。

『もう一つ注意して置きたいのは、隊員の内、少くとも一人土地の言葉を知つてゐる必要がある。この爲には今頃から、例へばカルカッタの日本人で、山の好きな人でも紹介して貰ひ、文通によつて親しくなつて置くとよからう。

大體以上の樣な話だつたが、一同非常に激勵されて、事變の爲やゝもすると萎縮しがちな我々にはよい刺戟だつた。いや、それ以上に大いに得る所があつた。偉い人に會へば、太陽を拜む樣に、何か惠を受けずには置かないものだ。モリス氏に御會ひ出來た事を心から感謝してゐる。

（昭和十三年二月七日）

山の消息

バウワア隊ナンガ・パルバートへ

パウル・バウワア氏が率ゆるドイツ・ナンガ・パルバート遠征隊は、タイムス紙デルヒ特派員發電報によれば、目的のナンガ・パルバートへ向ふのにカガン溪谷よりカイラスに赴き、登山本部はマンセーラ又はアボッタバードに設けることになつたと云ふことである。

この遠征は過般カシミール政府によつて一年一國許可主義に基き、今年は米國山岳會に許可が下つたため不許可になり、從來のカシミール經由のルートを放棄しなければならなくなり、一時中止をさへ傳へられたものであるが、僚友眠るこの山への弔ひ合戰に、萬難を排して新しいルートを採つたのであらう。

山岳・會報

原稿募集

かくて最後に私自身であるが、恰もブラゾ・トロ公のやうに、私の聯隊を後方から指揮して——

たとへ齢五十一歳だと云つても、高度は決して手加減して呉れる譯ではないが、今回は私のヒマラヤ入りの第八回旅行に當り、エヴェレストへの第二回目の遠征なので、私は第三キャンプ或ひは出來れはノースコルまで進んで問題を究明し、囚れぬ觀察を下し、更に可成りな緩衝地帶の役目をも果したいと考へた。登攀せぬリーダーについては、特に大遠征隊の場合には色々考へるべきことがある樣に私は思ふ。たとへ充分に意識せずにしろ、登攀隊の中に加はらうとするやうなことは彼には決して出來ない。そしてむしろ山上高く孤立させられたり、又は彼自身の骨折りで戰鬪力を失つて居ると云つた屢起る狀態に較べれば、前進本部に居る方が危險勃發に際し適當に善處することが出來るのである。

このパーティはその構成について英國空軍醫事局の好意に負ふこと大で、今回も再び非常な親切を以て全候補者を檢査して呉れた。前回同樣檢査は極端に嚴格で、その結果我々は二人の非常に優秀な登山家を、彼等の酸素缺乏に對する抵抗力の試驗の結果が不滿足だと云ふ理由で失ふに到つた。醫事局は勿論、飛行機操縱者を主として檢査するのだから、決して我々に對して獨斷的にその意見を强制するやうなことは、なかつた。しかし高所作業に關しては英國唯一の權威であるところに相談を持掛けておいて、その意見を無視したりしては全く理論が合はぬことである。ウキン・ハリス、モリス及びオリーヴァは海外に在つたため、出來る限りこれに近い檢査を受けた。

生き殘ると云ふことは自由を與へられるどころか、その次の訪問先は王立齒科病院だつた。こゝでフィッシュ博士とその同僚とは親切に我々のために時間を割いて呉れた。その言に依れば遠征隊の全隊員の顎は非常に丈夫な骨で出來て居るとのことだつたが、博士達は非常に禮儀正しかつたから我々の頭蓋骨の方の檢査は控へて下さつた。(!)更にそれから聖マリア病院へ、こゝでマツクリーン博士が種痘し、又腸チブスの豫防接種を行つた。スミジ・ウインドハムは既に定期的に陸軍の接種を受けて居たので、これらすべての臨時の刺傷に大いに惱まされたものだ。耳だけは個人の自由意志にまかされて、シプトンと私とはケンシントンの藥種店で二十分間頭を一方にばかり傾けて坐つたが、少なからず驚かされた。いづれの場合でも上になる方の耳へはオリーヴ油を一杯入れて、ちよつとでも首を立てるとこぼれるやうにされたからである。

現今一番多く議論されるエヴェレスト・パーティの人數の問題については、後に論じやう。こゝでは唯私は一九三六年度の遠征隊を組織した十二人は、あらゆる既知の標準から推してエヴェレストと取組むには最も適した任に堪へ得る均質の一隊であつたことをこゝに斷言したい。

(この節終り)

◇　◇

昭和十三年度暦

三　月　山岳三十二年二號發行
　　小集會
　　關西小集會
四　月　有志晩餐會
五　月　山岳三十三年一號發行
六　月　山日記發行
　　小集會
七　月　關西小集會
九　月　小集會
十　月　山岳三十三年二號發行
　　有志晩餐會
十一月　小集會
十二月　年次會員大會

◇　◇

圖書紹介

山岳展望　深田久彌著

本文三二三頁　寫眞十五葉
昭和十二年十一月　三省堂發行

「わが山々」の著者が更に世に送つた山の隨筆集である。前著と同じやうに山登りやスキーの旅の印象記、山への思慕を込めた隨筆、それに初心者向きの解說記事二三等を加へたもので多くは既に發表されたものを一書に纏めたものである。讀了して一番感じることはその記述がさすがに潤達なことであり、書齋裡の讀者をも緣の山野へ、白雪の世界へ引き込んで行く明るさ、樂しさに富んで居ることだ。大きな山登りをしなければ立派な登山記が書けないと思ふ人達には、こんなに到る處の日本國內の山登りから、こんな樂しい紀行文を物して呉れる著者の筆力がよい教訓にならうと思ふ。全く著者はさすがに筆に生きる人だけに、週末スキーの簡單な旅でさへも立派に文章に纏めあげる。行動と地理とにとらはれすぎた紀行文の多い登山界ではこういふのどかな氣持で著者の心境をたどれる樣な山の本が特に樂しく讀まれるのである。

この本の中でもその意味でいゝのはやはり紀行で、恐らく著者が賴まれて書いたであらうと思はれる一般的な山やスキーの隨筆、たとへば、「季節の誘惑」だとか「スキー登山」「天幕生活の一日」のやうな解說的な記述は魅力が少ない。

私はこの本の終りの方にある「光岳」を一番感心して讀んだ。快適な山旅の記述は何とかなるとしても八日間降り込められた山旅を、これだけ生き生きと表現することは難しいことだと思つたからだ。しかも相當腹も立つであらうこの雨にたゝられた旅をさへ樂しく感じ、明るく述べて居るあたりは山男特有の心境として同病者は嬉しく讀むのである。ヒマラヤもいゝが、我々に親しい山々の旅を、素朴に樂しく表現して貰ふことも大いに歡迎すべきである。

(T・S)

山日記編輯に際して

會員諸氏の絶大なる御支持によりまして、山日記の編輯は第九回目を迎えることゝなりました。

例年のことでありますが、新しい山小屋、山案內組合及び登山團體に關し御報告あらんことを御願ひいたします。

山日記編輯係

會員通信

北支戰線より

會報七一・七二の兩號御惠送下され有難く拜受致しました。當地も此處二、三日は三寒後の四温に屬しまして暖かです。此方へ參ります時は氷點下三十度位までは下るだらうと大に期待して來たのですが、寒くても二十五度か乃至はそれより二、三度位しか低下しないやうで、四温期に於てはプラス三度、風のない處では七、八度まで昇る日さへたまにありまして、いさゝか落膽の態です。それにアクリマチゼーションのせいでもありませう最近ではマイナス十度位までは寒さを覺えなくなりました

大同の直ぐ東北方に一八三〇米の高さには似合はぬどつしりした山があつて八合目あたりから上には白い班雪を殘してゐます。綏遠、チャハル方面の山岳展望臺として頂上は相當期待が持てますが、そんな暇もなく又敗殘兵も多少居りまして當分アルピニズムの對象にはなりません。然しも一つ僕を愉しませてくれる山があります。それこそ北に遠ざかりて雪白き山ありで、さつきの一八三〇米峯の左の肩から西北方に雪の木曾駒連峯を偲ばせるやうな一連の山脈が白銀色に耀いてゐるのです。

この連嶺はたしか大同から包頭に行く汽車の窓から見えると思ひますが、大同の北方約十五、六里、標高は大體二千米から二千二百米級です大同及びその附近の山ではスキーを使へるだけの雪は降りませんが、此方まで進出すればスキーは素晴しい粉雪を蹴散らかすことが出來ると思ひます。恐ろしく乾燥してますから大同の町でも雪の質だけは實に素晴しいです。

會報を頂いて御禮かた〴〵ちよつと蛇足を付け加えました。

會員の中にも出征者が多いそうですが、素晴しい日章旗の大陸進出、近い將來には北京あたりでJ・A・Cの小集會でも開けるやうな時代が來そうです。會員諸賢によろしく。

一月三十一日　大同にて　渡邊公平

昭和十二年度來室者數

昨年度中の虎の門事務室への來訪者數を來訪者名簿より拾つてみると左の通りとなる。

一月	一〇八人	二月	一四一人
三月	一一〇人	四月	一〇七人
五月	一三二人	六月	一六四人
七月	一一〇人	八月	三五人
九月	一五八人	十月	一一一人
十一月	八一人	十二月	八六人

合計　一、一〇三人（前年一、三三名）

一ケ月平均一〇八・五八（一〇一・九一）

一日平均（一ケ月二十五日トシテ四・三四（四・〇七）

會務報告

二月定例理事會

二月十五日　午後六時　虎の門事務室

出席者　武田、木暮、高頭、黒田、島田、石原、角田、

一、山岳編輯經過び本年度計畫の件

一、一九三七年版山日記決算報告及び本年度計畫の件

一、小集會の件

一、會計決算及び豫算の件

新着圖書

登山とスキー	二月號	其社
山小屋	同	朋文堂
ケルン	同	編輯室
地學雜誌	同	東京地學協會
寫眞月報	同	小西六本店
ツーリスト	同	J・T・B
國立公園	一月號	國立公園協會
登高行	第十一	慶應義塾大學山岳部
名古屋高商山岳部報	第十三	
因伯民談	一、二月號	鳥取鄉土會

Appalachia 1

Sierra Club Bulletin 12

Trail & Timberline 1

The Prairie Club Bulletin 1—2

The Mountaineer 2

La Montagne 1

Revue Alpine No. 314

Rivista Mensile C. A. I. 12

Butlleti C. E. C. 12

De Berggids 1

Planinski Vestnik 1

Unione Ligure Escursionisti 12

Bulltin du C. A. T. 12

會員寄贈圖書

田部重治監修　登山讀本　以上　黒田孝雄氏

民間傳承　第三卷四

方言　第七卷九　以上　高橋文太郎氏

會報投稿規定

◇原稿は山岳に關する研究、隨筆、紀行、消息の類に限ります。

◇原稿締切　毎月五日

原稿用紙は十六字詰のこと

用紙御希望の方には會から御送りします。

◇原稿は特に御希望なき限り一切返却致しません。

◇原稿の取捨は會報編輯係に御委せ下さい。その他編輯上の一切の事項は編輯係が全責任を負ひます。

昭和十三年三月十五日印刷
昭和十三年三月十六日發行

發行兼編輯者　角田吉夫

東京市芝區琴平町一（不二屋ビル）
發行所　日本山岳會
電話芝（四五）一六四九

東京市芝區濱松町一丁目十三番地
印刷者　植田庄助
印刷所　成文堂印刷所